

大分県の中世城館

— その保存と活用について —

渋谷 忠章

1 はじめに

大分県教育委員会は、平成七年度から九ヶ年をかけ県内に所在する城館調査を行った。当時、大分県の城館は、竹田市岡城跡が国史跡に、宇佐市光岡城跡、臼杵市臼杵城跡、真玉町真玉氏館跡、大分市府内城跡が県の史跡に指定されていたに過ぎなかった。また、大分県における城館の分布状況やその内容についてはほとんどが不明で、大友氏の詰め城であった高崎城跡や安岐町安岐城跡、宇佐市高森城跡は道路等が建設され、さらに台風による山林被害の復旧に伴う林道建設工事が城館を傷つける等、城館を取りまく課題が多くなってきた。一方では中世の遺跡に対する認識が全国的に高まり、各県における城館の基礎資料の収集が急務となり、大分県も国庫補助による中世城館の調査を開始した。調査は、各市町村教育委員会文化財担当者とび地元文化財調査委員等の協力を得て、可能な限りの曲輪の配置や虎口（城の出入口）の形式、城壁の屈曲など、城の平面計画全般の縄張り図の作成を行うとともに、古文書調査や地名調査等も行った。

その結果、確認された城館数は五六九カ所に及び、これらを県下全体の中で見通すことによって豊後南部の城館、大友氏の城館、大友氏以後の城館、国境の城館など地域性や歴史的背景の中で捉えることができ、調査によって伝承が史実となり新た

な歴史が誕生した地域も少なくなかった。¹⁾

2 中世城館とその調査

城といえば、壮大な天守閣や高い石垣と水堀に囲まれた大坂城や姫路城などを思い浮かべるが、こうした城は桃山時代から江戸時代にかけて築かれたもので、日本の城郭史の中では限られた一部にすぎない。我が国の城郭は、三万とも四万とも言われているが、その大半は南北朝から室町時代にかけて築かれた城と館である。

中世城館の特徴は、それまでの城が朝廷による国家事業として築かれたのに対し、武士による私的な築城となる。従ってその規模は様々である。また、中世の城の多くは、山や丘の頂上付近を利用して築いた山城で、有事の際に逃げ込むための城であり詰めめの城とも呼ばれる。

山城は、山上の尾根伝いに段々畑状の小さな曲輪をいくつも連ね、要所に空堀や土塁を設けた形式が一般的であるが、時には耶馬溪町長岩城のように石塁と呼べるような石積みも見られる。しかし、山城は日常の生活に不便なため、城主は山城のあたる山の麓や少し離れた平地に土塁や堀を巡らし、屋形、館、土居などと呼ばれる屋敷に居住した。

大分県で中世城館の発掘調査が行われるようになったのは、昭和五〇年代になってからで臼杵市栗山城、大分市尼ヶ城・守岡城・雄城城、安岐町安岐城等で行われたが、調査範囲が限られた一部であったり弥生から古墳時代の集落跡としての調査が中心で、城館としての十分な調査には至らなかった。そうした中で、本格的な発掘調査は、昭和五十四年から四年次にわたって行った玖珠町伐株山城跡の調査が最初で、運動公園計画に伴う確認調査であった。

山頂は尾根上を利用して七基の土塁に囲まれた曲輪が整然と並び、最も高所にある第七号曲輪（土塁遺構）は南北が五八m以上に及び土塁の高さが三mを越す部分もある。発掘調査は第一、第二曲輪等で行われたが、曲輪内には二間×三間と二間×二間の建物数棟が確認され、また、出土した陶磁器や土師質土器は形式分類と年代的な位置づけが試みられ、その後の大分県

における中世土器研究の先駆的なものとなった。

その後は、各種の開発事業に伴って城館跡の調査が急増し、大分市高崎城跡では管理用道路の建設に伴って畝状堅堀の一部が調査された。また、天正十六年黒田孝高が弟の利高に築城させた高森城は道路工事によって本丸の一部等が消滅したが、その後の調査で三ノ丸地区北側で重層構造の大型礎石建物が確認されるなど、縄張りの構造がきわめて特徴的であることが判明した。

また、学校建設や圃場整備事業等に伴って、館跡の調査も多く行われた。豊後高田市カワラガマ遺跡は、天正八年、田原親貫が大友氏に反旗を翻して立て籠もったとされる佐野鞍懸城や奥畑鞍懸城に近く、十五〜十六世紀代の二重に堀を巡らした館跡が確認されている。

大分市では賀来中学校遺跡が賀米氏館跡と言われ、幅四mを超える溝に囲まれた中に井戸跡や掘立柱建物跡が検出されている。一方、上野ヶ丘にある上野大友館跡は、東西九〇m、南北一一〇mの土塁と堀で囲まれていることが明らかになり、十五〜十六世紀代の遺物が出土している。

大野郡では朝地町一万田館跡の確認調査が行われ、台地を堀切で区切り南北二〇〇m、東西一三〇mの平坦部を造りその内部に方一町の区画を設け館としている。掘立柱建物跡や柵列、土塁、溝等が確認され、主郭の区画は北を溝、西は土塁、東と南は柵列と考えられている。

直入郡では、久住町仏原の上城遺跡と小路遺跡が朽網氏の館と考えられている。小路遺跡は、両側が急な崖状の台地にあり基盤整備事業に伴う調査で一辺八〇〜一〇〇mとされる溝に囲まれた方形館が推定されており、内部は六三棟以上の掘立柱建物が検出され大型の建物が多い。出土遺物には中国華南三彩やタイ産の壺及び京都系土師器等があり、重要な施設であることがわかる。また、上城遺跡では十三世紀から十四世紀にかけての方形の溝や三九棟以上の掘立柱建物が確認されている。

また、大分県の館跡として唯一県史跡に指定されている真玉町真玉氏居館跡は、幅約一二mの堀が巡り東西一四〇m、南北

一一〇mを「内城」、その外側は「外城」と呼び、複数の溝が検出されて広大な館跡であることが確認されている。文和元年（一二三二）、大友系の木付氏が真玉荘の地頭に封じられここを居館としたと伝えられる。確認調査の結果、最も古い時期が十四世紀代で木付氏の入部と館の構築が明らかにされつつある。

こうした館跡は、県内で一〇〇箇所余が確認されているが、比較的平地にあるため一方では開発の犠牲にも成りかねない状況にある。

3 大分県の中世城館とその特質

天文十二年（一五四三）に伝来した鉄砲の飛躍的な普及・発展や室町時代末の城主層の再編成は、日本の城郭に大きな影響を及ぼした。それに加えて、各地域の歴史的な背景や、地理的な条件が城づくりに重要な役割を果たした。そうした中で、大分県では大友氏の城郭、国境の城郭、薩摩軍豊後侵攻の城郭といった歴史的な流れの中で城郭の特質を捉えることができ、さらにこれらを踏まえて、地域的に県中部、県南部、県北部、県西部の城郭に分けることも可能である。こうした歴史的背景や城館の現状、古文書類の遺存状況を踏まえた調査結果を、城館調査終了後の平成十四年に文化庁主催の中世城館遺跡保存検討委員会に報告し、次の十四ヶ所の城館が国指定史跡の候補として推薦を得た。

高崎城 大分市大字高崎

大分市と別府市の境に位置する高崎山頂付近にあり、高崎山は四方を見極めることのできることから四極山とも呼ばれる。瀬戸内海国立公園の特別保護区や天然記念物高崎山サル生息地に指定され、標高六二八mの山頂付近を中心にして遺構群がよく残されている。山頂は、北から南東に弓なりにのびる形状で、最高所から北に一〇〇mの所を掘り切り、二条の竪堀で両側を固め北の境とし東南端の削平段までの全長約六〇〇mを範囲とする。最高所の主郭は、長径六二m、短径五七mほどの五角形に近い平場で土塁を巡らす。最高所の曲輪が石を用いないのに対し東南にのびる曲輪の半分は石を多用する。

高崎城が史料に見られる最初は、建久七年（一一九六）豊後守護職等に任命された初代大友能直の先発隊として派遣された古庄重能の上陸に当たり、土着武士阿南惟家が「高崎山に陣取り」抵抗した（大友家文書録）とある。その後の正平四年（一三四九）筑前国深江種重軍忠状写には、同三年南朝方が鞍懸・高牟礼・高崎等を攻撃したとあり、この高崎は高崎城と考えられ、大友軍が籠城していたものと推察されている。

正平十年（一三五五）懐長親王と菊池武光の南朝軍によって府内が進入され、これを機に大友氏時（八代）は高崎城の本格的な築城を行ったと伝えられる。さらに、正平十四年には親王軍が氏時の籠もる高崎城を攻め、正平十六年には九州探題の斯波氏経が入り北朝軍の指揮を執るが、翌年には南朝方の菊池武光軍が豊後に進入し氏経と氏時は高崎城へ退いている。

その後も、永正十三年（一五一六）朽網親満が高崎城に立て籠もり大友軍と敵対し、薩摩軍の豊後侵攻に対しては、戸次川原の合戦で大敗すると大友義統は府内の大友館を放棄して高崎城に籠もり、さらに宇佐郡の竜王城へ退却した。このように、高崎城は大友氏の詰め城として数々の歴史的な舞台に登場するが、文禄二年（一五九三）の大友義統の豊後除国と共に廃絶となったようである。

鹿鳴越城 速見郡日出町大字豊岡

山香町との境にあり標高約五二〇mの尾根先端部に位置し、日出から豊前宇佐方面に通じる主要道にらみを利かす絶好の場所にある。縄張りは、主郭と考えられる南北約二六m、東西約一三mの第一曲輪と北側の第二曲輪を中心にし、その間と北側を堅堀と連接する二条の大規模な堀切で遮断し、特に峠方向の北東斜面部は、削平段と壮大な長さの堅堀群が設けられ防御を強く意識している構造である。

記録的には永正年間（一五〇四―一一）に大友親治が田北親幸に当てた書状に見えるのが最も古く、親治が城番の親幸に与えたものである。また、二〇代大友義鑑の大永二・三年（一五二二・二三）の感状には鹿鳴越城衆各中及び田北氏に対して、登城のうえ堅固な守備と落人逮捕や鹿鳴越城への在城を命じるなど、大友氏の豊前方面に対する重要な拠点であったことが知

られる。

雄渡牟礼城 国東町大字成仏

「小門山」と呼ばれる標高約五三・五mの独立峰の頂上にあり、三六〇度の展望が可能である。山頂平場にある四つの階段状の曲輪を一段の帯曲輪が取り囲む。曲輪群は全体で東西九・五m、南北二・五～三・五mの長方形をしている。帯曲輪から北側斜面に三本、東側斜面に一本の堅堀が掘られている。明応四年（一四九五）八月の田原氏歴代勲功次第注文に「…宮方時、雄渡牟礼城、同高崎城…」と見えるのが初見。

亀城 国東町大字中田

田深川と横手川に挟まれた西から東に延びる丘陵にあり、二つの川が合流する先端に位置している。東西約一三〇m、南北四〇～六〇mの長方形の平場を二段の螺旋状の帯曲輪が巡る。西側は堀切で丘陵を遮断している。国東田原氏の館と伝えられている。

御所の陣 国東町大字上成仏

雄渡牟礼城から北東に約一km下がった標高約三三・一mの尾根の結節点の平場に位置する。その結節点の平場を巧みに使い二ヶ所の曲輪をし字状につなげ、尾根と繋がる部分はことごとく堀切で遮断している。また、二つの曲輪の西側は一段低くなって二つの曲輪がある。「御所の陣」の呼び名は地元の話で伝えられているが、江戸時代の『豊城世譜』にも見られる。

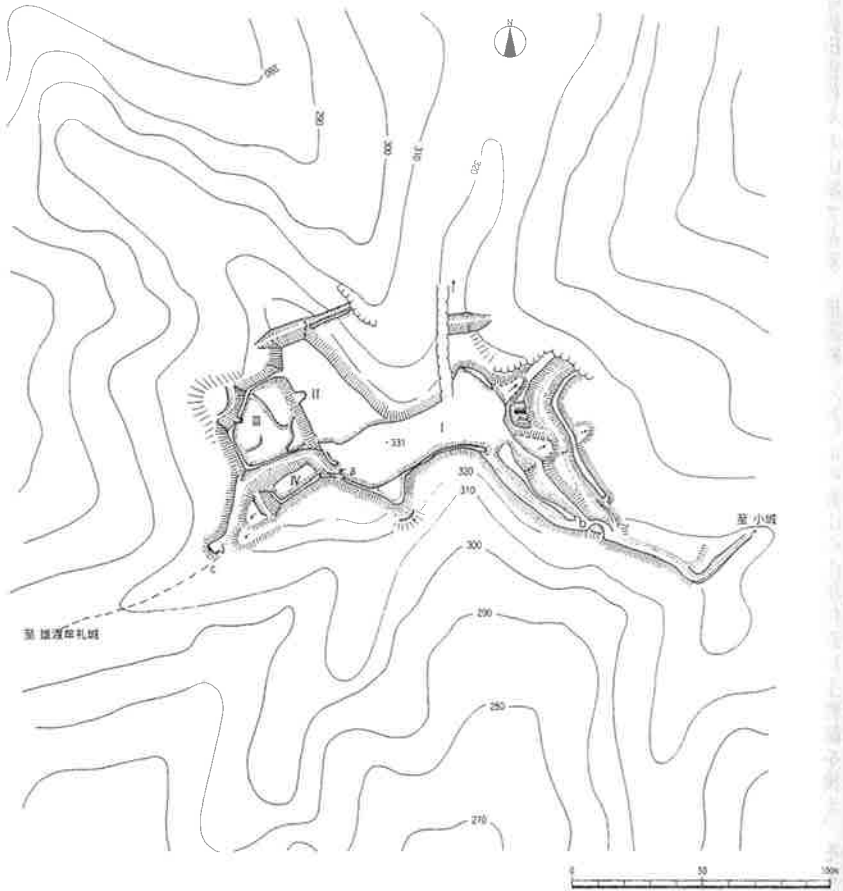
梅牟礼城 佐伯市稲垣・上岡、弥生町小田・井崎・上小倉

標高約二二・四mの梅牟礼山頂付近にあり、県南最大の河川である番匠川とその支流によって三方を囲まれている。佐伯荘を本拠とする佐伯氏の居城で、最も高い北側の曲輪を主郭にし四つの曲輪が南北に繋がる。また、これらの曲輪に通じる尾根は複数の堀切等できごとく遮断されている。第二と第四曲輪については一部で発掘調査が行われており、十五世紀後半から十六世紀前半のものと、十六世紀後半の遺物が出土している。

大永年間（一五二一〜一五二八）に佐伯惟治が築城したと伝えられ、文書等では、大永七年（一五二七）大友義鑑が佐伯氏の強大化をおそれ臼杵長景に榎牟礼城を攻めさせたのが初見。また、天正十四年（一五八六）には豊後に進入した薩摩軍の一隊が当城の侵攻を企てたが、佐伯惟定は敵を寄せつけず堅田方面で撃退したとある。

津賀牟礼城 竹田市大字入田字矢原・十角・岩本

緒方川と十角川が合流する独立丘陵上に位置する。丘陵頂部は細く長くのびるやせ尾根で、標高三四九mの山頂部に一の曲輪が作られ、榎牟礼城と同様にそれぞれの方向に派生する尾根



第1図 御所の陣縄張り図 (1/2,800)
 (「大分の中世城館」より)

はことごとく堀切と豎堀で切断されている。その他にも落差5mの巨大な堀切や切岸、大規模な豎堀、畝状豎堀、土塁等が施されており、構造的には防御意識を強く表現した特異な縄張りとなっている。

津賀牟礼城を本拠とした入田氏は、大友加判衆に名を連ねる大友氏の有力家臣で、入田親廉の代には義鑑に重用され権勢をふるっていたが、天文一九年（一五五〇）の大友二階崩れの変後、戸次鑑連らと抗戦するが落城し所領を没収される。その後、天正七、八年ごろに、入田義実が大友義統に許され旧領への復帰を果たすが本拠であった津賀牟礼城には入れなかったため、天正十四年には義実は島津方に翻る。従って津賀牟礼城は島津軍の肥後口からの侵攻に対する防御の拠点となり、特異な縄張りはこうした歴史的動きの中で、防御を強く意識し実践的な城郭へ改修したことが推定されている。

山野城 久住町大字仏原

久住連山の一つである黒岳に近い標高約七五〇〜七〇〇mの尾根状の丘陵に立地し、丘陵の両側は河川による浸食が深く自然の要害を利用した朽網氏の山城である。黒岳の裾野からのびる丘陵の付け根付近に築かれており、丘陵の両側を堀切によって切断された全長は約八〇〇mとなり、県内最大級の山城である。縄張りは、城域の両端を大規模に堀切り、内部の曲輪群を防御している。内部は大きく三地区に機能が分けられているが、各地区とも中心曲輪と櫓台状の曲輪及び階段状の曲輪群を基本としている。

山野城は朽網城とも記され、すでに永徳二年（一三八二）の史料に見られることから、このころから朽網氏の山城であったと考えられる。しかし、朽網氏は永正十三年（一五一六）親満の乱で大友親治に討伐され、その後に入った入田氏によって再築が行われ、田北堀、入田堀、志賀堀、一万田堀などその再築に当たった大友一門の諸將の堀の名前が残っている。林道開設事業に伴う発掘調査で、一万田堀から陸橋部（土橋）が確認されている。

佐田城 安心院町大字佐田

青山城とも呼ばれ、佐田荘の地頭佐田氏代々の山城である。標高約三〇〇mの青山の山頂付近に主郭部を構え、そこから派

生ずる尾根や尾根先端にも独立した城郭遺構が見られ、広範囲に及んでいる。

最高所の主郭を含む約四〇〇mの範囲が中心曲輪群となっており、比高差約一〇〇mの谷を隔てた東側約四〇〇mの独立した山には、楕円形をした単郭の曲輪がありその南側は横堀を巡らせている。さらに、主郭曲輪群の西側や南側の尾根側にも曲輪やそれを取り巻く帯曲輪、豎堀、横堀、堀切、土塁などが確認されている。また、曲輪の一部には土留め用の石列や角をもつ高さ一mほどの自然石の石積みなども存在している。

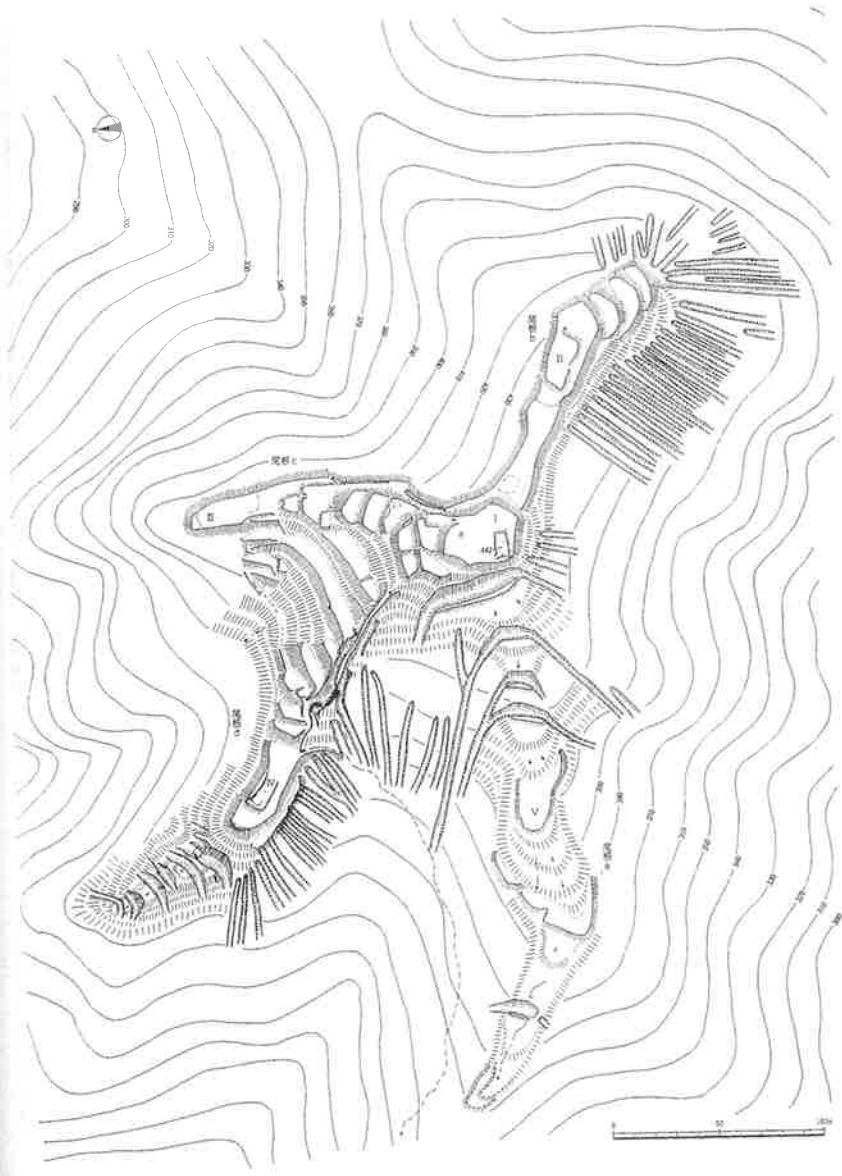
文書では、佐田泰景軍忠状に明応七年（一四九八）に大友親治が「佐田古城」を攻め、佐田泰景は「飯田山佐田山所々御陣等泰景馳走之段」とあり、所々御陣は頂部の主郭以外の曲輪群を指しているものと考えられる。しかしこれだけの大規模な城郭をもつが、佐田城に関する文書・記録は少ない。

妙見岳城 院内町大字妙見

標高四四二mの妙見岳頂上を主郭とし、そこから派生する尾根や斜面に遺構が確認される。山頂は見晴らしがよく、北側は宇佐平野からさらに山口県を望み、その反対側は安心院盆地や豊後の山々が広がる。

主郭曲輪の隅には五m×一〇m、高さ約一mの長方形の基壇状の高まりがあり檣台と考えられる。その他の曲輪は尾根を削平し階段状に曲輪を造っている。堀切、切岸を多用しているのも特徴的である。全体的には、斜面の緩やかな部分には畝状豎堀を入れ、尾根は何重にも堀切で遮断している。

大内氏の豊前経営の拠点として造られ、明応八年（一四九八）には「宇佐郡院内衆」が同心して「妙見尾」に城郭を誘ったとあり、十五世紀末から十六世紀初頭には城郭としての整備がされていたようである。天文元年（一五三二）には、大友義鑑と大内義隆の激戦の舞台となっている。その後も大内氏は城番を置き、施設の修繕を行っているが、弘治三年（一五五七）に大内氏が滅ぶと大友氏が豊前の支配を確立し、妙見岳城は大友氏の城となる。天正十四年（一五八六）、薩摩軍の豊後侵攻の際は大友義統の弟である田原親盛がおり、府内から逃れた義統や宣教師達をかくまっている。



第2図 妙見岳城縄張り図 (1/3,500)
 (「大分の中世城館」より)

標高約四九四mの独立峰である「烏帽子岳」山頂にあり、急崖の南側を除く三方は五十四条の畝状堅堀が取り巻く。主郭は東西四〇m、南北二五mの方形で、中央部は一・五mほど高くなっている。その周囲は半円状の帯曲輪が取り巻く。虎口は平虎口で、正面は畝状堅堀の間が広く開いている。主郭は切岸で固めるが、東側の第二曲輪は大きな石が点在するなどほとんど手を入れていないようである。

長岩城 耶馬溪町大字川原口

宇都宮一族野中氏の山城で、耶馬溪溶岩がするどく切り立った山の頂上部にある主郭をはじめ、五ヶ所に関連遺構が存在している。

城郭への入り口は、谷沿いに「一の城戸」、「二の城戸」、「三の城戸」が並び、そこから東の台を登り本丸と呼ばれる主郭に達する。東の台から主郭までは石塁が連なる。主郭の周りは幅七、八mの帯曲輪が取り巻く。また、主郭の北面などは石垣が積まれている。本丸の南西側には「西の台」と呼ばれる平場があり西側は石塁で固めている。

その他、本丸地区と谷を挟んだ東側の尾根上には、南から「陣屋跡」、「馬場」、「古城の鼻」と呼ばれる曲輪や石塁が見られる。さらに他の場所にも石積みや石塁などが存在し、石を多用した特異な山城である。こうした石塁や石積みは、「古城の鼻」と呼ばれる場所には見られず、また尾根線に堀切が施されるなど部分的に古い段階の要素が確認されることから、こうした石塁や石積みは、天正十六年（一五八八）豊前に入った黒田氏に備えたものと考えられる。

中津城 中津市二ノ丁ほか

福岡県との境をなす山国側の河口近くにあり、川と海に面した標高四・六mに位置している。城域は直角三角形で北西側を山国側が流れ堀の役目を果たしている。本丸、二の丸、三の丸からなり、薬研堀、内堀、中堀が残り、本丸の周囲は総石垣で囲まれる。近年の公園整備に伴う発掘調査等で、黒田如水時代の石垣が随所に残っていることが判明し、本丸と三の丸の間の

石垣は当初は今より低く幅も狭かったが、各時代を経て現在の規模になったことも明らかになった。現在も調査中であるが、九州でも最古の高石垣をもつ城として注目されている。

角牟礼城 玖珠町大字森

玖珠盆地の北側にある角牟礼城は、標高約五七七mの角埋山山頂一帯にあり、三方を切り立った険しい崖壁で囲まれている。角埋山東側は、宇佐・中津市に通じる国道三八七号線が走り、豊前地域と結ぶ古代からの交通要衝地にあたる。盆地を挟んだ南側には、玖珠城と推定される伐株山城がある。

角牟礼城は、源為朝が久寿年間（一一五四～五六）に築城したと伝えるが、文明七年（一四七五）三月二十七日の志賀親家書状に「くすつのむれの城」とあるのが初見。天文二年（一五三三）四月一六日には、大友義鑑が平井左右衛門尉に角牟礼勤番の労を謝し、いっそうの守備を命じている。また天正十四年～十五年の島津軍の進入に際しては、森・古後・太田・志津利氏ら玖珠群衆が籠城し城を死守したことから、地元では難攻不落の城として保存されている。

現在、山頂には本丸、二の丸、三の丸、水の手曲輪と呼ばれる曲輪があり石垣で囲まれており、発掘調査によって二の丸北側から瓦葺きの櫓門跡が完全な形で検出された。また、伝搦手門を登った水の手曲輪でも同規模の櫓門が検出された。伝二の丸は周囲を石垣で囲み縁辺部に土塁が残るが、礎石建物跡が確認されている。伝三の丸跡は大きな岩が点在し自然地形をそのまま残した状態で、石垣以外人工的な造成は見られない。その他、三の丸の東側に四条、西側に六条の堅堀が残っている。角牟礼城は、本来豊前側からの進入を防ぐ豊後の境目の城であり、中世の山城として玖珠群衆によって支えられてきたが、大友氏除国後毛利高政が入り石垣に囲まれた近世城郭へと移る過渡期の城として注目されている。

以上の城館が国指定史跡の候補にあげられるのは、遺存状況が良好であると言うことだけでなく、大分県の歴史の中ではいは城郭史の中で重要な位置を占めているからであり、具体的には次のような大友氏直営の城郭、大友家臣団の城郭、国境の城郭、織豊系の城郭のなかで捉えることが可能である。

大友氏直營の城郭 鎌倉時代に豊後国の守護職を得た大友氏は、初代の能直から三代の義統にいたるまでの約四〇〇年にわたって領主として君臨しており、大分県の城館の多くは何らかの形で大友氏と関連をもつ。その中で大友氏直營の城郭が高崎城で、南北朝以来の居城として高度な縄張りが見られる。遺存状況もよく、規模的にも大分県を代表する城館である。また、鹿鳴越城は大友氏が府内を防衛する上の拠点の城郭であり、完成度の高い城郭として重要視される。

大友家臣団の城郭 県内に所在する大半が大友家臣団の城郭であるが、そのうち国東町の雄渡牟礼城、亀城、御所の陣が国東田原氏に関する城館として、梅牟礼城、津賀牟礼城、山野城は田原氏と同じく大友氏有力家臣団の城郭であるとともに、大規模な城館として注目される。

国東田原氏は、大友能直と側室白拍子の間に生まれたとされる泰広が国東郡田原別府に下り田原を称したことに始まる。その後、観応二年（一三五一）に貞広が国東郷の地頭職を与えられ、国東町の飯塚に城を築き領主的な発展を遂げるが、常に大友家とは距離を置いた行動が見られる。飯塚城は現在の国東小学校付近と考えられ、切岸状の削平段があるが城郭のものか不明。雄渡牟礼城は、構造的には田原氏の館と言われている亀城と同じで、館をそのまま山城として用いた構造である。御所の陣は尾根の結節点の平場を巧みに利用したコンパクトにまとまった城館で、完成度も高い。

次に、大野川上中流域を含む豊後南部は、この地域が大野荘という大友氏の重要な荘園が展開していることもあって多くの城館が見られるとともに、戦国期には「国衆」と呼ばれた大友有力家臣団が盤踞し、巨大な城郭が出現している。その中で、梅牟礼城、津賀牟礼城、山野城はいずれも県内最大規模を誇る城郭で完成度も高い。また、これらの城郭の縄張りは、主郭の回りは切岸のみで、主郭に通じる尾根は何重にも堀切るといふ共通した構造をしているが、こうした構造はこれらの城主であった佐伯氏、入田氏、朽網氏が十六世紀前半から中頃にかけて反大友的立場をとり、大友義鑑や義鎮によって誅せられたことと深い関係があったものと思われる。

国境の城館 豊後は南を日向、北を豊前、西を筑前・筑後・肥後に接し、国境の城郭群も多く見られるが、特に豊前は周防

の大内氏や毛利氏に幾度も侵攻を許しており、重要な位置を占めていた。

妙見岳城は、その大友氏と大内氏の攻防戦の舞台になった城郭で、大内氏の滅亡に伴い大友氏の北の最重要城郭となったものである。烏帽子岳城は、豊後側にある国境の城郭である。妙見岳城に六〇余り、烏帽子岳城に五四本の畝状堅堀が施され、畝状堅堀を多用する典型的な城郭である。佐田城は、横堀と堅堀を巧みに配した大規模な城郭であるとともに国境での重要な位置を占めている。部分的に石積みが見られることから、黒田氏の豊前入部との関係も考えられる。

織豊系の城郭 中津城は、豊前から大友氏の勢力が除かれた直後の城で、角牟礼城は大友氏除国直後の遺構が残る県内では数少ない城郭である。中津城は、最近の発掘調査で黒田氏による築造当初の石垣も確認され、九州最古の本格的織豊系城郭として注目されている。また、角牟礼城は中世から近世城郭への移行を示すとともに、文禄・慶長期の高石垣を顕著に残し、さらに当時の櫓門跡等が確認されたことから、平成十七年三月に国の史跡に指定された。

その他、在地系の石積みを施している長岩城も大分県の城郭史の中ではきわめて重要な位置づけがされ、その背景に黒田氏の豊前入部と城主野中氏との攻防を物語ることが出来る。また、三重町松尾城は天正十四年島津義弘の弟家久軍一万余騎が豊後国進入に当たって在陣し、府内・佐伯・大野方面侵攻の本陣となったもので、豊後における島津軍の陣跡として重要である。

4 中世城館の保存と活用

平成十六年一〇月九日、中津市において中津城の歴史的価値を見直し町づくりを活かすための「中津城シンポジウム」が開催され、市民ら約四〇〇人が参加した。中津城は、九州最古の近世城郭として注目されていたが、市の「中津城公園整備計画」に伴う事前の発掘調査で、その時代の石垣や遺物が確認された。特に、桐文丸瓦や金箔瓦の出土は秀吉との関係を具体的に示すものとして注目される。

シンポジウムに先駆けて行われた「石割実験」は、石工の技を検証すると共に中津城の石垣の魅力をいっそう市民に訴える

ものとなった。一方、シンポジウムにおいては各講師から中津城の歴史的価値や全国的にも貴重な城郭であることが語られ、今後の中津の町づくりはどう活かすかについての討議が行われた。

また、角牟礼城跡の国指定は、地元之宝として、長年にわたり清掃活動や保存に力を注いできた「つのむれ会」の方々はにとっては、待ち望んだ吉報であった。

角牟礼城跡が注目されるようになったのは、平成四年十月、県教育委員会が実施していた発掘調査の指導に來県していた国立歴史民俗博物館の千田嘉博氏により、石垣積み¹⁰の技法がいわゆる「穴太積み」によるものであること、しかもそれが天端まできわめて良好な状況にあることが明らかになってからである。

こうしたことから玖珠町教育委員会は、平成五年より三ヶ年にわたり発掘調査による遺構の残存状況や石垣調査等を行い、その結果伝大手門跡より巨大な櫓門に復元される礎石建物が発見されるなど、織豊期の城郭として全国的にも注目されるようになった。そして平成七年十一月十一日・十二日の両日、「よみがえる角牟礼城跡」と題したシンポジウムが開催され、当時、国立歴史民俗博物館石井進館長、奈良女子大学村田修三教授をはじめ我が国の城館研究の第一人者の参加の下に、角牟礼城をめぐる様々な謎を解明するとともに、郷土の城を中心とする新たな町づくりの方法や問題点が論議され、県内外から約八〇〇人が参加した。その内容については、平成九年、新人物往来社より「よみがえる角牟礼城」として刊行されている。

中津城は、天正十六年（一五八八）黒田孝高が造営を始めるが、慶長五年（一六〇〇）黒田氏にかわり細川忠興が入城し、すぐにその子の忠利によって増改築が行われ元和六年（一六二〇）頃完成した。さらに、寛永九年（一六三二）、細川氏の熊本転封によって小笠原長次が入部し城下町の整備が行われ、享保二年（一七二七）には譜代大名奥平昌成が入城し明治四年（一八七二）まで存続する。現在ある天守閣は昭和三十九年に造られたコンクリート製の観光用建物で本来の位置にあつたものではない。また、本丸は神社地と公園地、二の丸は裁判所等の公共施設、三の丸は学校や住宅地となっており、今後の中津城の整備には多くの課題が残る。現在進められている整備事業は、都市計画サイドの「町づくり総合支援事業」による内堀と

石垣の修復事業であり一時的なものである。これまでの確認調査では各時代の石垣やその他の遺構が確認されており、その他の堀や本丸跡及び城下町についても詳細な確認調査し、どの時代の整備を行うのか、どこまでの復元整備をするのかといった基本計画を早急に作成する必要がある。

角牟礼城跡は名勝耶馬溪に含まれ、自然林に囲まれた角埋山の山頂にある。その自然林を生かし、地元の方々に支えられ保存されてきた経過があり、今後とも自然林を活かした整備が基本となる。しかし山頂に築かれた石垣は、すでに崩壊した部分や危険な状態の石垣もあり、石垣の写真撮影や図化が急がれる。また、角牟礼城の麓は県指定の名勝旧久留島庭園、有形文化財末広神社本殿・末広神社栖鳳楼があり、さらには武家屋敷跡や城下町の跡がよく残されており、重要伝統的建造物群の選定対象となりうるものである。角牟礼城跡ではすでに櫓門や礎石建物が確認されているが、山頂での建物の復元は管理上の問題もあり、城下町を含めた総合的な整備の中で考えるべきであるが、珍珠町の大きな観光資源ともなりえるものである。

角牟礼城と同じ日に中世大友氏の菩提寺である大分市万寿寺跡の一部も史跡指定がなされた。万寿寺跡は、寛文四年（一六六四）に書かれた『禅餘集』『蔣山略記』によると、創建は徳治元年（一一三〇）とされ開基は大友第五代貞親、開山は直翁智侃である。禅宗の官寺制度である五山・十刹・諸山の制では十刹に列せられ、鎌倉・室町時代の九州では最高級の寺院であった。平成十四年度の確認調査で創建段階の十四世紀代から、島津氏の侵攻により消失する十六世紀代までの遺構や遺物が良好な状態で確認され、すでに国史跡に指定され公有化が進められている大友館跡とともに、中世の豊後府内を代表する重要な遺跡と位置づけられた。

こうした市街地における広大な遺跡の保存には、地権者の絶大な協力と高額な予算が必要となり市民の理解を得ることも欠かせない。大分市ではすでに「大友氏遺跡を活かしたまちづくり検討委員会」を設置し、発掘調査やこれまでの研究等で明らかになった中世大友城下町跡を現在の町づくりに活かすための基本構想案の策定に入っている。大友氏遺跡は大友氏館、旧万寿寺、府内城下町等からなるもので、将軍家や管領家と類似する規模や施設をもった広大な館をはじめ当時の城下町の全容が

明瞭に残っている例は全国的にも稀少で、我が国を代表する中世遺跡として貴重である。さらに大友遺跡は、大分市の中心地にあり交通の利便性に優れている。整備の方法とその活用によっては、大分市だけでなく大分県の観光の顔にもなりうるものと確信する。中津城や角牟礼城においても、整備の方法と活用によってはその地域の重要な観光施設となることも間違いないだろう。

中世城館遺跡保存検討委員会によって推薦を受けたその他の城館は、集落から離れた高い山頂にある場合もあり、整備し活用するのは簡単なことではない。しかし、これらの城館はその地域のみならず大分県の中世史を語るに欠かせない貴重な遺産であり、行政と市民が一体となって取り組まなければ保存は困難である。国指定とするには発掘調査による遺構の残存状況や範囲の確認等が必要であり、その後の整備についてもそうした調査の結果を踏まえ行われるべきである。観光資源として活用することも一つの方法であるが、その城館のもつ歴史を正しく理解させる整備が最優先であることは言うまでもない。

かつての文化財保護行政は、こうした遺跡や史跡等の保護については厳密な保存を第一義としてきたが、佐賀県吉野ヶ里遺跡や青森県三内丸山遺跡等の発見に伴って「遺跡をもっと多くの人に知ってほしい、地域おこしや観光資源に利用したい」等の声が高まり、最近では保存・整備だけでなく積極的な公開と活用が求められてきた。

特にその発端となった吉野ヶ里遺跡は、マスコミに発表された平成元年には百八〇万人を越える見学者が訪れ、その年の一般公開から平成六年までの経済効果は七四億円と報道されている。その後歴史公園としてオープンした平成十三年は六八万人、平成十四年は五九万人と減少傾向にあるが、佐賀県にとつての観光資源であることには間違いがない。大分県の遺跡や史跡を必ずしも観光資源にする必要はないが、整備活用は保存の最大な措置であり、集客力のある整備活用が求められているのも事実である。いずれにしても、歴史にふれ、見ることによって人々の心が癒され、幸せを感じる整備・活用が必要である。

参考文献

- (1) 『大分の中世城館』第一集～第四集 大分県教育委員会(二〇〇二)～(二〇〇四)
- (2) 『伐株山城跡』 玖珠町教育委員会 (一九八四)
- (3) 『カワラガマ遺跡』『佐野地区遺跡発掘調査報告書』豊後高田市教育委員会(二〇〇二)
- (4) 『賀来中学校遺跡』大分市教育委員会(一九九二)
- (5) 『上野大友館(上野館)』大分市教育委員会(二〇〇〇)
- (6) 『一万田遺跡』『朝地地区遺跡群発掘調査報告書Ⅱ』朝地町教育委員会(一九九四)
- (7) 『小路遺跡・上屋敷遺跡』久住町教育委員会(二〇〇〇)
- (8) 『上城遺跡』久住町教育委員会(二〇〇二)
- (9) 『山野城』久住町教育委員会(一九九五)
- (10) 『角牟礼城跡』玖珠町教育委員会(二〇〇〇)
- (11) 『よみがえる角牟礼城』大分県玖珠町(一九九七)